# 『遠い空』あるいは もうひとつの『ゴドーを待ちながら』

大貫　徹

Tomioka Taeko, known as one of the most famous feminist writers, has focused on the roles of men and women in modern Japanese culture. We may find it difficult to get beyond the somber overtones of her writing; her characters seem apathetic, and her plots can be depressing and disturbing. But her work is not without merit: her writing can be read as social commentary on Japanese society. It's easy to see how her female protagonists are strong, independent, and openly sexual. In this paper, we attempt to analyze *To-i Sora* (*The Deep Sky*) (1979), comparing with *En attendant Godot* (1952) de Samuel Beckett.

## 第１章　抱擁としての性交

昭和54年５月号『海』(中央公論社)に掲載された富岡多恵子の短編作品『遠い空』は、匿名の語り手が二十数年前の５月東北地方のある町で生じた殺人事件を報道記事のような形で告げるところからはじまる。それはどこにでもある事件のようである。

> 二十数年前の五月三日に、東北本線のM市に近いQ駅の北東にある、日暮山と呼ばれている海抜百二、三十メートルの凸凹の激しい植林地内で六十九歳の老女が殺されていた。
>
> 杉苗植えにいった菅野ソヨさんが帰らないので、近所のひとや消防団で山をさがしたところ、日暮山で死体となっていた。死体には杉の枝と土がかけてあった。(1)

ところがこの殺人事件、すぐさま奇妙な様相を帯びはじめる。それは絞殺されたうえに被害者ソヨさんの「モンペの紐が解かれ、両膝の下までさげられていた」（7頁）からである。69歳の老女への凌辱（！）という、滑稽とも偏執的とも思えるようなイメージを漂わせながら、同時に語り手は冷静に事件のその後を伝える。まずソヨさんの家族について語り、さらには犯人と覚しき人物にまで言及する。だがいずれもアリバイがあるということで、話は事件当日の目撃者たちに移る。そのさい語り手は思わせぶりなエピソードを挿入する。それは「蛇ぜんまい」を巡るエピソードである。

> このうち、赤木、松山くんは日暮山から帰る道で、四十歳ぐらいの男に出会っていた。（略）その時少し離れたところから男がおりてきて蛇ぜんまいを採り、杉林の中から自転車をひき出して、それに乗って去っていった。それを見ていた松山くんは赤木くんに、「ほら見ろ、蛇ぜんまいを採るような馬鹿もいるぞ」といい、ふたりは笑った。蛇ぜんまいは食べられないので、それを採るひとはいなかった。（9-10頁）

そもそも食べられない「蛇ぜんまい」を採る「四十歳ぐらいの男」とはいったい何者なのか。「去年まで東京にいた」（24頁）赤木くんと同様、土地の者ではないということなのか、それとも文字どおり「馬鹿」にすぎないのか、読者は戸惑うばかりである。にもかかわらず、語り手はひとりでに動き出し、事件の2年前の夏のある出来事を語りはじめる。それは松山くんの母親である朝乃さんの家にひとりの男がやって来たという出来事である。

> 男が松山朝乃さんの家にはじめてきたのは二年前の夏であった。黒い、古ぼけた自転車をひいて店の中をうかがっていた。朝乃さんの家は、簡単な自転車の修繕もする、中古の自転車を扱う古物商であるが、雑貨屋と煙草屋も兼ねていた。（10頁）

かなりの饒舌ぶりを発揮している語り手もこの男となるととたんに沈黙してしまい、男の心の内どころか名前さえも明かさない。ひたすら朝乃さんの目に映った男の様子を語るのみである。

> 男が古ぼけた自転車をひいて店の中まで入ってきたので、修繕を頼みにき

たか、通りがかりに空気入れを借りにきたのだと朝乃さんは思った。「今日は、だれもいねえから、修繕はできねえすよ」と朝乃さんはいったが、男は自転車を倒し、ポケットから千円札を出して振りながら奥へ入ってくる。(10頁)

最初、朝乃さんは、男が自転車の修繕でも頼みに来たのかと思う。だが男は千円札を振るばかりで何も言わない。そのうち男が「言葉を聴くことも発することもできぬひと」(11頁)であることが判明する。やがて朝乃さんは、男が「千円札を朝乃さんに見せ、その千円札をまたポケットにねじこんでから、ズボンをおろす手振りを」(同頁)したり「自分の性器を握る振りを」(同頁)したりすることに気づく。男が同じ手振り身振りを繰り返すのを見て、朝乃さんは「男が自分に性交を求めている」(同頁)のだと分かる。それも「なまじ言葉による粉飾がないから、男の求めているものの強さだけがはっきりと」(同頁)見えてくる。夫はすでに病死しているものの、当時55歳で27歳を頭に三人の息子がいる朝乃さんは、このとき思わず男の手をとる。そのまま「店から奥の住居の方へ通じる狭い土間の通り廊下」(12頁)を進み、その先にある台所へ男を押し込め、重い戸を閉める。そこで朝乃さんは「子供を抱くようにその男の肩と胴体に手をかけた(のち)」(同頁)、みずからスカートをまくりあげ「その見知らぬ、口をきかぬ男」(同頁)とあとさき考えずに性交をしてしまう。語り手は、朝乃さんの「その時の気分は、単純に、男がかわいそうに思えただけだった」(同頁)と伝えている。

この「かわいそう」な男こそが、じつは2年後に69歳の菅野ソヨさんを絞殺し、その帰り道に「蛇ぜんまい」を採っていった人物なのである。のちに語り手はその経緯を詳しく語ることになるのだが、この時点ではもちろん誰も知らない。語り手もこのときは「男」と呼ぶばかりである。

(…)男は背丈があり、がっちりした体格で、角ばった大きな顔は陽にやけ、髪は伸びてバサバサしている。ねずみ色のシャツにねずみ色の膝の出たふといズボンをはいていた。(10頁)

浮浪者風のまま、ただひたすら性交を求めつづける男は、まさに「発情した若いオス」そのものである。

(…)男は、息をはずませて、ズボンをおろす仕草をまだつづけている。そ

の目は朝乃さんの目をじっと見すえたままだ。発情した若いオスが、声をあげることもできないでそこにいるように朝乃さんには思えた。（略）男はズボンをおろした。陰毛の中から充血した男の性器が突出し、放っておくと次の瞬間にはさらにせり上ってくるかに、朝乃さんには見えた。（10-12頁）

このような男を前にした場合、聾唖ということもあってある程度の同情は覚えながらも、募ってくる嫌悪感を抑えきれずにひたすら忌避するのがおおかたの反応であろう。ましてや55歳である。この物語の舞台となったと思われる昭和30年代では老女と言ってもおかしくない年齢である。その老女に露骨に性交を求めてきたのだから、逃げない方が普通ではない。実際、殺害されたソヨさんは逃げようとした。

（…）ソヨさんは、這いまわって逃げた。そのソヨさんに、男は、朝乃さんにしたように、指で性交を表現する記号を示しつづけた。（27頁）

ところが朝乃さんはそうしない。それどころか受け入れてしまうのである。それは「単純に、男がかわいそうに思えた」からである。というのもこの男には「発情した若いオス」という言葉から想像される荒々しさが欠けていると思えたからだ。朝乃さんをじっと見すえた目などは子ヤギの目としか言いようがない。聾唖であるということも、この場合むしろ痛々しさを強めているようだ。言ってみれば「せり上がってくる」自分の欲望をどう扱っていいか分からぬまま、ひとり立ち竦んでいる「かわいそう」な若いオスと朝乃さんには見えたのである。このため朝乃さんは男を「子供を抱くように」（12頁）あるいは「嬰児を抱きしめるように」（13頁）包み込む。そこには弱々しい幼子を慈しむ母の姿がある。

（…）二度目の時、朝乃さんは立ったままブラウスのボタンをはずして、男の頭部を嬰児を抱きしめるように両腕でくるみ、男の後頭部を撫でた。男は膝を少しかがめて、朝乃さんに頭を撫でられてしばらくじっとしていた。（13頁）

朝乃さんはまるで聖母のようである。とはいえ、このあと実際の性交に及ぶことになるわけだが、そのときも聖母として振る舞うことができたのかど

うか、実際はおおいに疑問である。しかし語り手はこの点になるとかんたんに触れるだけである。

> (…) 男は愛撫のようなことをしないから、性交はいつもごく短い時間ですんでしまうのだった。(17頁)

愛撫抜きの性交というのだから、いきなり挿入しすぐさま射精してしまうということなのだろう。語り手はこうした性交を「それは情事ではなかった」(17頁) と結論づけているが、それは情事どころか性交でもない。むしろ交尾と呼ぶべきである。だが朝乃さんと男との間に生じている性交を交尾と呼ぶことはできない。そこにはすくなくとも「幼子を慈しむ母」という人間関係が成立しているからだ。もちろん日常の性交に付きものの愛とか恋といった、感情面での装飾はいっさいない。だから男と女の性交でもない。「交尾」でも「男と女の性交」でもない性交、それをここでは「抱擁としての性交」と呼びたい。母が子供を抱擁するように朝乃さんと男は性交するのだ。しかもこうした性交を朝乃さんと男は会えばいっしょにお茶を飲むようにするのだ。

> (…) まるで訪ねてきた顔見知りのひととお茶をのむように、台所や日暮山の中でその度に性交した。性交それ自体は、最初の時から、ごく自然だった。(18頁)

そもそもこうした性交が「最初の時から、ごく自然」にできるものかどうか。朝乃さんが死んだ夫との間でもこのような性交をしてきたとは思われない。その意味でこれは男の出現とともに生じた新たな「自然」ではないかと思う。実際、とつぜんやって来た「発情した若いオスが、声をあげることもできないでそこにいるように」(11頁) 思えた瞬間、朝乃さんは「松山朝乃」ではなくなり、いわば「発情した親メス」となって思わずスカートをまくりあげてしまったのだ。このときから新たな「自然」が生じてしまい、この男を前にすると朝乃さんはしぜんに「発情した親メス」となり「抱擁としての性交」をしてしまうのだ。

> (…) 朝乃さんは男を見て性的な欲望を感じたことはなかった。ところが、

男が性交を強く求める仕草をすると、朝乃さんも男と同じように、ただ性交する他ないみたいな気分になるのだった。(18頁)

とはいえ「発情した親メス」として「発情した若いオス」である男と性交する55歳の朝乃さんの姿が滑稽でも悲惨でもなく、むしろきわめて美しく見えるのは「抱擁としての性交」をしているからだ。これをさらに強めているのは、ひとつには、男が「言葉を聴くことも発することもできぬひと」(11頁)であるという点である。もうひとつには「ただ漠然と、男が強く性交だけを求めるのを見て、かわいそうに思えた。嫁コがこねえんだな」(13頁)という朝乃さんの嘆きに代表される、東北地方特有の状況もあろう。それでなくても若い娘がいないのだ。だからこそ55歳の老女があえて相手をしてやらなければならないのだという認識である。このため見知らぬ男と性交をしても、それは聖なるものとして讃えられるのである。物語はこの関係をさらに進める。聖なる母である55歳の女が真心から接することで男が人間的な感情を取り戻すように見えるのだ。

朝乃さんは、男にとってただひとりの知人であり、友人であった。性交の他にはなにもかかわるものがないけれども、ただひとりの知人であった。(略)朝乃さんは、はじめてかかわりをもった他人であった。(16頁)

実際、朝乃さんが男に関わりを持ちはじめることによって、男の表情にも変化が現れ、笑いが漏れ、饒舌ささえも発揮するようになる。

(…) その時、男がかすかに笑ったように思えた。男の笑うのを朝乃さんははじめて見た。(略) 男はさかんに身振り手振りで喋っている。朝乃さんにはまったくわからない。こういう男の饒舌ははじめてだった。(20-21頁)(傍点作者。以下同様)

あるとき朝乃さんは男の写真を見てびっくりし、おもわず次のような感慨を漏らす。

朝乃さんは写真で、男が畑仕事をしているのを見て異様な感じがした。(略)破れた麦わら帽子をかぶって立っている姿は、まるで案山子みたいだ。手振り身振りで、性交を求めたときのような、人間らしい目付がまったく感じら

れない。世界のはてに、ぽつんとカカシが立っている。(28-29頁)

こうした観点からアメリカ文学者で文芸評論家の千石英世は次のように言う。

老婦人との性的交際は、近親婚の果てに「ケモノ」のように産み落とされ、激しい労働の果てに「ケモノ」のように育った男に、「人間らしい目付き」を与えたのである。老婦人と男の性的交際には、そのような性愛の不思議が発現したのである。[2]

そのため朝乃さんだけには、なぜこの男が69歳のソヨさんを殺害したか理解できたのである。

(…) 朝乃さんは、まるで自分がソヨさんを殺したように思えた。そして、殺人犯のように、その殺意が説明できぬ孤独を感じた。わかられてたまるか、ともその時思っていた。(略) 喋らなくてもわかるではないか、男が懸命に頼んでいるのだ、それがわからないのだから、殺されても仕様がない、と朝乃さんは殺意を正当化した。なぜ、コトバでいわなくてはわからないのか、人間が人間の前に立って、人間全体で頼んでいる、それを嘲ってことわったソヨさんは殺されて当然だ、と朝乃さんは思った。(31-32頁)

千石英世がわざわざ「性的交際」と記しているように、朝乃さんは男と性的に「交際」することによって互いの気持ちが通じ合うようになったのである。上の引用にある「なぜ、コトバでいわなくてはわからないのか、人間が人間の前に立って、人間全体で頼んでいる」という一節は物語の中でもっとも美しい表現である。「発情した若いオス」に過ぎなかった男が、55歳の朝乃さんと「まるで訪ねてきた顔見知りのひととお茶をのむように、台所や日暮山の中でその度に性交」することによって「人間」となったのだ。まさに「抱擁としての性交」の頂点をなす瞬間である。卑俗でいささか不気味とも思える日常を積み重ねることによってあるときふいに誰も知らない崇高さに達するかのように、朝乃さんと男の性交は聖なるものとして描かれている。そのぶん「それを嘲ってことわった」ソヨさんは「殺されて当然」となる。しかし物語はこれで終わらない。ここからさらにもうひとつの物語が生まれるのだ。

## 第２章　永遠の性交

そのためには「発情した若いオス」がその名に恥じない奇妙な行動をすることの確認からはじめたい。

> (…) 最初にきた日から、一日おいて男はまた同じように自転車をひいて店に入ってきた。その次の日もきた。二度目からは、もう千円札は振らなかった。しかし、最初と同じように、性交を求める身振りはした。二度目も三度目も、最初と同様、奥の台所で朝乃さんは男の欲望をしずめた。(略) その後、男は、秋までこなかった。(13頁)

男が二度、三度と続けて来るのは分かる。一度味を占めた以上はそれをいくども繰り返したくなるのはよくあることだからだ。しかし「その後、男は、秋までこなかった」と語り手は言う。そのすこしあとに語り手は次のように続ける。

> (…) 男がくるのは、春と秋に、二、三日つづけてくるだけで、毎日とか、毎週二度も三度もくるわけではないから、だれにも怪しまれなかった。(以下略)
>
> 男がなぜ春と秋にくるのか、くるとなぜ二、三度つづけてくるのか、朝乃さんにはわかるはずがなかった。文字通り忘れたころにくるのだった。(16頁)

ここで誰しも「さかり」という言葉を思い浮かべるであろう。朝乃さんもこのことをかなり気にしていた。

> (…) なにが、さかりのついた犬か猫みてえに春と秋にきて、と朝乃さんは思い出すと腹立たしくなって顔が赤らむ。(略) しかしその一方で、朝乃さんは、きっと明日もくるにちがいない男におびえていた。男は必ず、二、三日はつづけてくるのだ。季節の訪れが、見知らぬ男のオトズレとは。(24頁)

性交を重ねるにつれて男はやがて（以前には見られなかった）荒々しさを滲ませはじめる。そのため朝乃さんは男に対し恐怖を覚えはじめる。

男を日暮山に従えていった朝乃さんには、最初の時のように、男がかわいそうだという思いだけではなくなっていた。恐怖があった。他人にいいふらされる恐怖ではなく、拒絶すれば殺されないかという恐怖だった。(17頁)

とはいえ、この荒々しさも「発情した若いオス」に付きものと考えれば分からないわけでもない。だが分からないのはもうひとつの方だと朝乃さんは言う。

男に対して、朝乃さんの恐怖はもうひとつあった。男がいったい何者かまったくわからぬことである。何者か、というのは、名前や住所がわからぬということではない。男が得体の知れないバケモノだと思うわけではない。言葉を発することこそできないが、男は正常な人間であって異常でも異形でもない。ただ、その男が朝乃さんの店に突然あらわれ、季節が変わると必ずくる。忘れずにやってくるのが異形のものでなく、普通の人間の男であるから、朝乃さんは恐怖しているのだ。(17-18頁)

朝乃さんの恐怖感をそのまま示しているかのように、この辺りの語り口はきわめてまわりくどい。何が言いたいのか、不明なところもある。しかし男が朝乃さんのところに「季節が変わると必ずくる」ことに不気味な恐怖を感じていることはたしかだ。このことを明らかにしているのが次の引用である。

(…) ただ、半年ぶりに、また最初の時のようにふいに自分の前にあらわれると、この見知らぬ男が忘れずに自分と性交するためにきたことがおそろしくなるのだった。なぜこの男の相手が自分なのか、と朝乃さんは思っておそろしくなるのだった。(18頁)

この短い文中に「おそろしくなる」が二度も繰り返されていることに注意したい。よりによってなぜ自分のところに忘れずにやって来るのか、という恐怖を朝乃さんは感じている。「男にとって女と性交するのは必要なのであって、遊びではない」(17頁) とある以上、必要なのは朝乃さんではなく女である。女であれば誰でもいいはずである。にもかかわらずどうして忘れずにやって来るのか、これが朝乃さんの疑問であり恐怖の種でもある。これはたんに「発情した若いオス」特有の行動とは思えない。なにかもっと別なものがここに潜んでいるようにも思える。

そもそもこの男はいったい何者なのか。男に関してはその名前も含め、正体をほとんど明らかにしてこなかった語り手もときおり男に関わる情報を漏らす。だがそれはすべて驚くべきものである。そのため、それが明らかになることで男に親愛感を抱くようになるどころか、逆により多くの不気味さを感じるだけである。まず男の年齢と家族構成が明らかにされる。

> 男はその時二十六歳で、姉がふたり、弟、妹がそれぞれひとりいた。ところが、この五人の兄弟姉妹のうち末の妹をのぞいて、四人とも音を聴くことも、言葉を発することもできなかった。男は、幼い時から友だちと遊んだことはなく、また学校へいったこともなかった。ふたりの姉も弟も同様で、みんなは結婚せぬまま父母の農作業を手助けしていた。家の中では父母と妹の三人が時折は喋り、あとの四人は別々に黙って生きていた。(12頁)

男だけが聾唖ではなく、5人の兄弟姉妹のうち、末の妹を除き、上4人がみな聾唖であり、学校にも行ったことがないという。引用文中にもある「別々に黙って生きていた」という一節に代表されるように、すさまじいほどの孤立状態である。この次に語り手が明らかにするのは、男の上の姉が二人の男たちに強姦される場面である。

> 男は、十か十一ぐらいの時、上の姉が強姦されているところを見たことがあった。夕方五時ごろには暗くなってしまう冬至のころだった。(略) 五十歳くらいのふたりの男が姉のうしろからきて、薄茶色の固い落葉の上に、姉を突き倒した。(略) 勿論、姉は声をあげられない。またよし姉が声をあげていても弟である男には聴えない。そしてまた姉の叫びを聴いても、男が声をあげることはない。男は姉を助けず、すこし離れた樹木のかげから、一刻一刻うす暗がりになっていく中で姉の下半身を見ていた。(13-14頁)

この場合も同様である。孤立感が痛いほど感じられる。とりわけ薄暗がりの中で犯されている姉の下半身を樹木の陰からただ見ているだけという男の姿が印象的である。犯されている姉もそれを窃視症のように熟視している男も、自分から逃げようという気も助けようという気もともにないように見える。そのためか、きわめて暴力的で騒々しい場面にもかかわらず、ここから生々しい叫び声や激しい怒鳴り声が聞こえてこない。あるのは受動的な惨めさと諦めばかりだ。語り手は男に関し「世界のはてに、ぽつんとカカシが立っ

ている」(29頁) ようだと表現したが、まさにそのような状況ではないか。ところがこの「カカシ」のような男がどういうわけか、「世界のはて」から動き出し、よりによって「自転車なら一時間は十分にかかる」(同頁) ほど遠い、朝乃さんのところに自分からやって来たのである。この積極性は驚くばかりだ。だが男が朝乃さんのところにやって来たのは元来偶然以外の何ものでもないはず。しかしその偶然が、季節ごとに規則正しく繰り返されることによって何か別なものへと変容しているように思える。そのことを朝乃さんが実感するのは「はじめて男がきてから」ほぼ3年目のときであった。

> 菅野ソヨさんが殺された前の日の五月二日に、男は朝乃さんの家へきていた。それはその前の年の秋から数ヶ月ぶりだった。はじめて男がきてから三年目になっていた。
> 五月二日に、久方ぶりに男を見た時、朝乃さんにそれまでにない不快感が走った。(20頁)

朝乃さんはそれをまず不快感として実感した。このあと朝乃さんは不快感の正体を明らかにしようとする。

> (…) 男ははじめてきた時と変らなかった。ナレナレしい態度をとったわけでもなかった。朝乃さんには、男がきたことが不快なのだった。またきたという感じではないのだった。男が今ここにきたのが不快でたまらなく思えた。男がここにいることは、自分のまわりの景色に合わぬものがなにか突然あらわれたように感じられた。(略) 異物が急に自分の空間にはまりこんできたように思えたのだった。男の背後には、家の外の光が透明にはりつめていた。それをおし破って、異様なものが入り込んできたと思えた。(20頁)

朝乃さんは、異物とか異様なものという言葉でその不快感を表現している。しかしそれまでの朝乃さんは「男は正常な人間であって異常でも異形でもない」と思っていたのだから、この変わりようは甚だしい。実際には男は最初から異物であり異様であったはずだ。にもかかわらず朝乃さんはそれを覆い隠していたと思われる。その典型が朝乃さんと男の最初の遭遇場面に見られる。

> 店へ入ってきた時は、うす汚れた四十歳ぐらいの男に見えたが、そばで見

るとまだかなり若いように思える。三十になるかならぬかの年頃に見える。男は息をはずませて、ズボンをおろす仕草をまだつづけている。その目は朝乃さんの目をじっと見すえたままだ。発情した若いオスが、声をあげることもできないでそこにいるように朝乃さんには思えた。(11頁)

はじめて見た瞬間「うす汚れた四十歳」と思えた男が「そばで見ると」じつは「三十になるかならぬかの年頃」で、そのうち朝乃さんは男が痛々しい「発情した若いオス」のように見えはじめ、やがて「かわいそう」と感じるようになり、その結果、すでに見てきたように「抱擁としての性交」を行うことになったわけである。ここにはあきらかに意識の隠蔽化がある。しかしそれが悪いというわけではない。実際、そうすることによって朝乃さんは男に「人間らしい目付き」をもたらすことができたからだ。だがそれも繰り返されることによって、荒々しさが男に現れはじめ、しだいに隠蔽化が困難となる。朝乃さんは次のように述懐している。

男を日暮山に従えていった朝乃さんには、最初の時のように、男がかわいそうだという思いだけではなくなっていた。恐怖があった。(17頁)

「男がかわいそうだという思いだけ」でスカートをまくりあげた朝乃さんが、その肝心の思いが弱まりはじめれば、当然ながら「抱擁としての性交」が困難となり、やがて世間の人々と同様、朝乃さんもしだいに男を「異物とか異様なもの」と思いはじめるようになるはずだ。しかし彼女の不快感はそれに尽きるものではない。その底にさらに大きなしかも根本的な恐怖が存在している。それは「なぜこの男の相手が自分なのか」(18頁) という疑問に集約される恐怖である。この点に関し仏文学者で文芸評論家の古屋健三は、それは実存的な恐怖であると言う。

(…) なぜこの男の相手が自分なのかと思って、朝乃は突然おそろしくなってくるのである。この恐怖はいわば実存的な恐怖で、解けない謎をまえにした人間のひるみである。[3]

その通りである。しかしそれで何かが明らかになったわけではない。というのもそれは単なる定義に過ぎないからだ。解けない謎を前にして怯んでい

る朝乃さんに対し、それは実存的な恐怖だよと定義しているに過ぎないからである。重要なのは、その中身を明らかにすることだ。というのも朝乃さんはここでふいに「永遠」という言葉を持ち出すからである。

> (…) 男がこれからもくると思うと、季節のめぐりが、ふいに「永遠」となって感じられてくるのだ。永遠に、見知らぬ男と性交をくり返す光景が見えてくるのだ。なぜ、「永遠」でなくてはいけないのか、と朝乃さんは腹立たしくなってきているのだ。(21頁)

偶然とは一回限りのものである。だがそれが繰り返されると偶然は必然へと変わる。それを朝乃さんは「永遠」と感じたのだ。しかもその繰り返しが季節の巡りと重なっているから、なおさらそのように感じたのだ。

ところで「抱擁としての性交」とは、これまで見てきたように、いわば母子関係から生まれたものである。「関係」ということであれば相手は限られ、それはいつしか必然へと止揚されるはずだ。これをふつうは「愛」と呼んだりするだろう。朝乃さんと男の場合、いわゆる愛はないが、関係を結ぶだけの必然性は存在した。したがって性交を重ねることによって本来ならば二人の関係が深く緊密になるはずである。その結果として「永遠に、男と性交をくり返す」ことに、喜びとは言わないまでも安心感に近いものが生まれてくるはずである。ところが朝乃さんは、上の引用にあるとおり「腹立たしくなって」しまう。どうしてだろうか。それは、朝乃さんの言う「永遠」が二人の「関係」の延長上にはないからだ。「家の外の光（略）をおし破って、異様なものが入りこんできた」(20頁) と朝乃さんが感じているように、このとき男は「関係」を打ち砕くように急に外部から侵入してきたと思われるからだ。

> (…) 異物が急に自分の空間にはまりこんできたように思えたのだった。男の背後には、家の外の光が透明にはりつめていた。それをおし破って、異様なものが入りこんできたと思えた。(20頁)

それまでは「黒い、古ぼけた自転車をひいて店の中を（恐る恐る）うかがっていた」(10頁) 男がこのときはいきなり「おし破って（略）入りこんできた」のである。朝乃さんから言えば、これまでの「関係」を確認する前に、男がいきなり奥まで侵入してきたということになるかもしれない。だがこのとき

の男は、もはや弱々しい幼子でもなければ「発情した若いオス」でもない。たとえ同じ顔、同じ様子、同じ仕草が見受けられたとしても、男はもはや以前の男ではない。明らかに別な何者かになっていたのである。

実際のところ「関係」を打ち砕くように侵入してきた男は、定義上、朝乃さんと「関係」を持つことはない。それはつねにすでに「見知らぬもの」である。その見知らぬものが季節ごとに朝乃さんのところにやって来て、愛撫抜きの性交を行う。朝乃さんはこうしたことを一瞬のうちに思い浮かべたのだ。思い浮かべたどころではない。朝乃さんにはそのことがはっきりと予見できたのだ。

> (…) 永遠に、見知らぬ男と性交をくり返す光景が見えてくるのだ。(21頁)

朝乃さんはこれを「永遠の性交」(22頁) と呼ぶ。もはや「抱擁としての性交」ではなく、「永遠の性交」という新しい事態が生じたのだ。「抱擁としての性交」があくまでも朝乃さんと男との母子関係の上に位置づけられているのに対し、「永遠の性交」は、朝乃さんにとって何の関係もない、まったく見知らぬ男との性交である。見知らぬ男が性交を重ねるごとにしだいに馴染み、やがて二人の間に「関係」を持つようになる、ということもない。いつまでも見知らぬままである。そのため、朝乃さんに倣って、それらを「異物」とか「異様」と呼んでもいいだろう。それは毎回まったく見知らぬ「異物」としてやって来る。そのため、そこには過去とか積み重ねた歴史といったものはない。あるのは一回限りの反復でしかない。ということは、当然ながら、特定の誰かでなければならないということもないはずだ。明らかに誰でもいいのだ。この「誰でもいい」誰かがかならず季節ごとにやって来て朝乃さんと性交をするのだ。仮に朝乃さんが逃げたとしても、それは追いかけてくるのだ。

> (…) 向こうは日暮山だ。そこには霞のような綿をかむったぜんまいがあちこちにはえている。まわりの植物は、発情している。植物のにおいが目にしみ、その色彩がまぶしく涙が出てくる。男は朝乃さんを追ってくる。「永遠」の性交が、朝乃さんを追っかけてくるのだ。(２２頁)

「永遠の性交」はどこまでも追いかけてくる。逃げても、逃げても、追い

かけてくるのだ。それは「永遠の性交」が朝乃さんとの「関係」のうえに成立しているわけではないからだ。ただ一方的にどこからやって来るだけだからだ。朝乃さんに取り憑いてしまったと言ってもいいかもしれない。実際、物語では、最初に来た男がソヨさん殺人容疑で逮捕された後、「誰でもいい」誰かが朝乃さんのところにやって来たのである。

> また秋になった。きのこ採りの季節がきた。もうあの男はこない、と思うと朝乃さんはゆったりと座っておれる。(以下略)
> (…) 墓から帰って家の前までくると、自転車をひいたあの男が家を背にして立っていた。(以下略)
> その時、男は朝乃さんの手をつかまえて、自分の性器のところにもっていきながら、うめくような不思議な声をあげた。「あ、おめえもがー」と朝乃さんは思わずいった。男は、訴えるような断片的な声を発しながら、性交を求める仕草をしている。(30-34頁)

ここで語られている男とは、実際には最初に来た男の弟である。だが兄とか弟とかはもはや関係がない。というより意味がない。この弟がいなくなれば次には誰かがやって来るはずだ。これが「永遠の性交」ということだ。ここから逃れる術はない。これが物語の終わりに付録のように語られている挿話の本当の意味だ。そのためこの物語は男の逮捕で終わらない。もうひとりの男がやって来ることがぜったいに必要なのだ。物語の末尾で朝乃さんは叫ぶ。

> (…) だれがここへいけといった、いったいだれがこのわたしのところへいけといったのか、だれが教えた、あの日暮山の男か、どうしてこのわたしを教えた、と朝乃さんは男のシャツの首筋を力なくつかまえて同じことをくり返しながら叫んでいる。(37頁)

「いったいだれがこのわたしのところへいけといったのか」と朝乃さんは叫ぶが、それはもちろん「あの日暮山の男」ではない。では誰か。それは分からない、というより、そもそも具体的な誰かを想定すること自体に意味がないように思える。それならば、それは「運命」なのか、あるいは「神」の意志なのか。実際、ギリシャ悲劇の『オイディプス王』のような物語として

この物語を考えることは魅力的だ。あるいは聖書にある『ヨブ記』のような物語として朝乃さんの人生について考えることも興味深い。しかし「運命」や「神」の試練物語としてこの物語を読むことはできない。そうするには、あまりにも日常世界の中に埋没している。もちろん、聖母のような姿を見せる瞬間だってあったのだから、朝乃さんが日常の中に完全に埋没しているとは言えない。とはいえ、朝乃さんをギリシャ悲劇の人物あるいは聖書に描かれた人物に模すにはやはりその背丈が足りないと言わざるを得ない。むしろ、その卑俗さにおいてきわめて近い存在として、サミュエル・ベケットの代表的な戯曲『ゴドーを待ちながら』(1953年初演) に出てくるエストラゴンとヴラジーミルを思い浮かべることができるのではないか。

## 第3章 『ゴドーを待ちながら』

よく知られているように、この作品では肝心のゴドーは現れない。しかしエストラゴンとヴラジーミルはゴドーが現れるのを待ち続ける。実際に男の子を介してゴドーからの伝言[(4)]さえあった。しかしゴドーは現れない。この作品はまさにその現れないゴドーを待つことがすべてである。

ではゴドーとは何者か。この作品の訳者でもある英文学者高橋康也が「(この作品は) いまだに新たな解釈を生成しては吸収してしまう巨大なブラックホールでありつづけることによってこそ、これは今なお傑作／問題作なのだ」[(5)]と述べているように、ゴドーに関して多くの解釈がある。その代表的なものは、高橋康也もあげているように「「ゴドー」を「ゴッド」のもじりと解して」[(6)]、それは神であるとする解釈である。したがって「神の死のあとの時代に神もどきを待ちつづける現代人、その寓意的肖像画」[(7)]がここに描かれているという説明がなされることになる。あるいは「神は死んでいない、二人の浮浪者は神の来臨を待ち望むキリスト者の裸形である。いや、彼らは神ではなく、まったく別なもの (革命、現世的利益、死、その他) を待っているのだ。いやいや、これは何かがやって来て救ってくれるという幻想への風刺・批判にほかならない (以下略)」[(8)]云々と解釈は永遠に続くというわけである。こうした解釈の当否はともかく、ゴドーとは、いずれにせよ、不在であるにもかかわらず、ぜったいに無視できない存在であることだけはたしかであろう。これを「神」と呼ぼうが「死」と呼ぼうがあるいは「運命」

と呼ぼうが結局は同じことである。言い換えれば、私たちが生きている、この世界の限界を明確に意識させてくれる存在、それがゴドーとなるのではないだろうか。もちろん、天国とか地獄とかいうような、神学的な枠組みの話ではない。そうではなく、たとえばある悪夢にうなされて思わず目が覚めたときなど、もうひとつの現実があるのを思い知らされるのにも似た、世界の限界への認識ということである。それは、自分で主体的に考え、行動しているつもりが実際には誰かによって操られているのではないかということへの意識化と言ってもいいだろう。20世紀になって発見したものに「無意識」がある。これなどまさに自分が主体的に行動しているようでじつはそうではないということの典型である。「無意識」に限らない。私たちが生きている現代社会そのものが巨大な抑圧機械となって私たちの生を犯しているとも言えるだろう。いずれにせよ、私たちが生きている世界がすべてではないということを感じさせてくれる存在、それがゴドーと言えるではないか。実際、『ゴドーを待ちながら』にはそれをきわめて叙情的だがみごとに表現している有名な場面がある。

エストラゴン　あの死んだ声を。
ヴラジーミル　あれは、羽ばたきの音だ。
エストラゴン　木の葉のそよぎだ。
ヴラジーミル　砂の音だ。
エストラゴン　木の葉のそよぎだ。

沈黙

ヴラジーミル　それは、みんな一度に話す。
エストラゴン　みんな、かってに。

沈黙

ヴラジーミル　どちらかというと、ひそひそと。
エストラゴン　ささやく。
ヴラジーミル　ざわめく。
エストラゴン　ざわめく。

沈黙

ヴラジーミル　何を言っているのかな、あの声たちは？
エストラゴン　自分の一生を話している。
(略)
ヴラジーミル　ちょうど、羽の音のようだ。
エストラゴン　木の葉のようだ。
ヴラジーミル　灰のよう。
エストラゴン　木の葉のよう。[9]

いたるところに沈黙があるにもかかわらず、ここには声が、音が溢れている。あたかも世界が声や音で満ち溢れているかのようだ。この声や音は、もうひとつの世界のそれであるかもしれないし、また、「無意識」のように、自分で喋っていると思っている声がじつはつねにすでに前もって存在し、むしろ声が私たちを通して語っている、ということなのかもしれない。ここで再び高橋康也の言葉を借りれば、「この芝居では、言葉が、それを発する人間の主体性からあまりにも遊離したため、まるで外から人間に降ってくるように感じられることがある。(略) 言葉が人間を存在せしめるのだ」[10] という状況なのかもしれない。こうした状況を象徴するのがゴドーという存在である。じつは、朝乃さんも、エストラゴンとヴラジーミルと同様、こうした存在に気づいたのではないか。気づいただけではなく、朝乃さんは一瞬ながらこうした存在を実感したことがあったのではないか。

(…) 朝乃さんには、男と性交した時の日暮山のあの場所、かぶさってくる男のうしろに見えた空の遠さが思い浮かんでくる。(29頁)

この一節から物語の題名である「遠い空」が導き出されていると思われるが、男と性交しながら、朝乃さんは男の肩越しに見える空の遙か向こうにある存在を感じ取っていたように思える。そのときもちろん朝乃さんは恐怖を覚えたことだろう。しかし同時にある種の解放感をも覚えたのではないだろうか。というのも、高橋康也が「(『ゴドーを待ちながら』を見ることで)「世界は劇場、人生は芝居、人は役者」というメタシアター的な快感に、醒めたまま、浸ることが可能になるだろう。そしてわれわれの生の感覚を鈍らせる

(略)「習慣」というやつから、自分を解き放つことができる」[11] と言うとおり、朝乃さんは男との性交を通して、たしかに「「習慣」というやつから、自分を解き放つことができ（た)」と思われるからだ。

> (…) そのためにまた今更無理矢理に女に立ち戻らせられるのが屈辱だったのだ、つまらない屈辱ではないか、女のくせしてなにが年寄りだ、年寄りだって女は女ではないか、と朝乃さんは自分があの男になったようにソヨさんをたったひとりでひそかに弾劾していた。(32頁)

60歳間近の朝乃さんはそのとき「自分を解き放つことができ」、女として「みずからに対しても誇りうる「性的充足感」」[12] を得たと思われる。だからこそ湯治場でまとい付くように聞こえてくる世間の声に朝乃さんは激しく逆らうのである。

> (…) 朝乃さんのそばでは、まだ、ふとった女が、ソヨさんソヨさんと喋っていて、朝乃さんには、ソヨさんの他の言葉は聞えてこないのだった。からだにしみついたあつい湯が少しずつ冷めていくのに、ソヨさんという名前は火の粉みたいにからだのあちこちにへばりついた。朝乃さんは、まるで自分がソヨさんを殺したように思えた。そして、殺人犯のように、その殺意が説明できぬ孤独を感じた。わかられてたまるか、ともその時思っていた。(31頁)

とはいえそれが解放感ばかりをもたらすわけでもないことは言うまでもない。ゴドーに取り憑かれてしまったエストラゴンとヴラジーミルと同様、身動きできぬまま地べたでいたずらに日々を過ごしてしまう恐怖をも実感したようにも思える。朝乃さんはそれを「たちの悪い借金とり」と称している。

> (…) 男は、「永遠」の性交というよりも、一生涯自分から離れぬ、たちの悪い借金とりのように思えた。性交ならばことわれるが、借金とりは金を払うまでひきさがらない。(36頁)

しかしながらたとえそれが「永遠の性交」であろうとも「たちの悪い借金とり」であろうとも、朝乃さんは、エストラゴンとヴラジーミルと同様、恐怖感と解放感とが絡み合った状況の中で生きていくことになる。というのもすでに朝乃さんは「ゴドー」を感じ取ってしまったからだ。

## 注

（1） 富岡多恵子『遠い空』（『遠い空』所収短編、中央公論社、1982年、7頁）（初出:『海』中央公論社、1979年5月号）ただし煩雑さを避けるため、この短編からの引用はすべて頁数のみを本文中に記載する。

（2） 千石英世『異性文学論』（ミネルヴァ書房、2004年8月、63頁）

（3） 古屋健三『「内向世代」論』（慶應義塾大学出版会、1998年、247頁）

（4） Samuel Beckett, *En attendant Godot,* Les Editions de Minuit, 1952. この作品の68-72頁と129-131頁の2カ所において男の子が登場し、ゴドーの言葉を登場人物に伝える。いずれも「今夜は来られないが明日は来る」という内容のものである。

（5） 『ゴドーを待ちながら』（安堂信也、高橋康也訳）（ベスト・オブ・ベケット1、白水社、1990年、190頁）

（6） 『ゴドーを待ちながら』前掲書、191頁。

（7） 『ゴドーを待ちながら』前掲書、191頁。

（8） 『ゴドーを待ちながら』前掲書、192頁。

（9） Beckett 前掲書、87-88頁。ただし日本語にするにあたって注（5）記載の翻訳書を参照した。

(10) 高橋康也『サミュエル・ベケット』（今日のイギリスアメリカ文学3、研究社、1971年、119頁）

(11) 『ゴドーを待ちながら』前掲書、195-196頁。

(12) 千石前掲書、63頁。